

文 教 福 祉 常 任 委 員 会 記 録

令和6年2月16日（金）午前9時59分～午11時19分（9階909会議室）

○出席委員（9名）

委 員 長	川又 康彦
副委員長	高木 直人
委 員	佐藤 勢
委 員	遠藤 幸一
委 員	佐々木 優
委 員	石原洋三郎
委 員	大平 洋人
委 員	穴戸 一照
委 員	半沢 正典

○欠席委員（なし）

○市長等部局出席者（なし）

○案 件

所管事務調査「認知症対策と家族支援に関する調査」

- 1 行政視察の意見開陳について
- 2 意見交換会について
- 3 その他

午前9時59分 開 議

（川又康彦委員長）ただいまから文教福祉常任委員会を開会いたします。

本日の議題については、委員会次第のとおりです。

初めに、行政視察の意見開陳についてを議題といたします。

先月、1月30日から2月1日の3日間にわたり、兵庫県明石市、千葉県柏市、群馬県高崎市へ行ってきました。皆さん、本当にお疲れさまでした。ありがとうございます。明石市では認知症あんしんまちづくり条例と認知症あんしんプロジェクトの取組について、柏市では在宅医療と多職種連携

の取組と柏フレイル予防プロジェクトについて、高崎市では認知症伴走型支援事業や介護ＳＯＳサービス事業等についてそれぞれを聴取してまいりました。そこで、本日は、行政視察で聴取した各市の先進的な取組について、委員の皆様からのご意見を頂戴したいと思います。

ちょっと日にちが空いておりまして、解散のときに忘れないうちという話はしていたかと思うのですが、私自身忘れていた感じもある中、皆さんからのご意見をお伺いいたしたいと思います。順番にご意見聴取お願いしたいと思います。３つの市、それぞれ市ごとに聴取をしていきたいと思いますので、順番も左側と右側と順番、順番でできればと思いますので、よろしくお願いいたします。

では、最初の兵庫県明石市について、時計回りで大平委員からよろしくお願いします。

（大平洋人委員） 条例の制定の経緯等をお伺いさせていただいて、結局認知症になっても大丈夫ということで、共生社会をつくるために理念として定められたという話を伺って、メモをしていました。そういった中で、かなり審議会やヒアリングを丁寧になさっているのだなというのを感じたということと、特にその中でのテーマとして市民のみんなで支え合うということを非常に前面に出しているということを、あとオリジナルで明石市としてケアサポーターというのを、患者本人も含めてやっていくという取組を国以上に実施なさっているということをすごく先進的な取組だなというふうに感じました。それと、チェックシートで１回限りの５００円の図書券を差し上げるということとか、そういった資料、オレンジ手帳という冊子を頂きましたよね。言っていましたけれども、そういったものもあって、費用的にはかなりかけている感じはいたしましたけれども、やっぱりやる以上は中途半端にやってはいけないのではないかとすごく感じました、そういった意味合いで非常に有意義な視察だったというように感じました。

（半沢正典委員） 大平委員と重複しますが、やはり認知症との共生という理念に基づきまして各種施策が充実し、そして駅のものとか、看板、旗みたいなものとか出したりして、認知症に対しての往々にして偏見とか差別とかいうようなことを非常にクリアしていると。それは施策もそうだし、印象に残っているのは、子供たちの小さいときからの教育で認知症に対する今ほど言ったような偏見とか差別の意識をなくして、共生社会へ小さいときから教育の中に取り込んで対応しているということが印象的だったということと、この前の参考人からもありましたけれども、認知症にとっては、やっぱり早期発見、早期治療というのが非常に大切な対策で、それに対してしっかりと、チェックシートから始まってということだと思うのですけれども、そのような形でしっかりと、チェックシートで少し点数が高ければ治療の推奨をしたり、認知症になれば、プロジェクトの中で段階ごとにしっかりと施策をぶら下げて対応しているという印象がありました。

（佐藤 勢委員） 私が一番印象に残っているのは、やっぱり早期治療、早期予防という、ここかなというふうに思いました。認知症に関しては、一番回復とか維持しやすいというのはやっぱり早期の発見だというふうに感じていましたので、それをしっかりと明石市のほうでは取り組んでいるというのはすばらしいことだなというふうに感じてお聞きしていました。特に早期の申請書ではないですけれ

ども、チェックシートを全世帯、対象者に配って、回収もすごく高い回収率になっているということ、ここはやっぱり非常にすばらしいなというふうな取組だなというふうに思っていました。500円をどうするかというのは議論するとは思いますが、そういうふうな形で取り組むというのは本市でもやっていただきたい一つの取組になるかなというふうに思ったところです。

（佐々木優委員） 病気の実態を正面から捉えて対策を打つ、しかもできるだけ手厚くということが本当に衝撃だったなと思います。やっぱりそういう考え方は認知症だけではなく、ほかの事業にも生かせるのではないかなというふうに感じました。認知症の方の実数を、人数をつかんでいくということに力を入れることで必要な体制が取れていくということも重要だなというふうに感じました。認知症は誰もがかかり得るということを市民の皆さんが知ることを土台にして、市の役割とか市民の役割、事業者の役割、連携する医療機関の役割などがとても明快で、市民から見ても納得いく条例の中身ではないかなというふうに思うし、特にやっぱり早く気づくということに対処していくということが明記されているのはすごいなと、やっぱりそこだよなというふうに感じました。そういう早期に見つけるためのいろんな工夫をして、認知症チェックシートに図書券をつけて書いてもらうという、そういうちょっとした工夫がやっぱりとても有効なのだなというふうに改めて感じましたし、認知症の疑いがある場合も診断費用を全額補償するとか、タクシー代も出すとか、畳みかけるような安心感を与えてくれる事業ができるということは本当にすごいなと思ったし、明石市は子育て支援でも有名だけれども、誰もが年老いていくということを、そこを支援するということが将来の不安を和らげて、そこに住み続けることができる安心感につながって人口が増えてきたのではないかなというふうに思いました。高齢者福祉を充実させることの意義がよく分かったと思います。

（遠藤幸一委員） 先ほど来多くあるとおり、私も皆さんと同じ意見というところではあるのですが、多くの自治体が視察されているということでありまして、本当に非常に先進的な取組をされているというふうに感じましたし、多くを学ばせていただきました。認知症になっても安心して暮らせるまちづくりというふうに銘打ってやっているだけあって、本当に地域全体で寄り添って支えて、そういったことに対して工夫した取組を、オリジナルの取組を非常にやられているなというふうに思いましたし、あと家族負担の軽減に向けた取組についても非常に多くのことを考えて取り組まれているなというふうに思ったところでございます。

先ほど半沢委員のほうからもありましたけれども、子供への認知症への理解活動の取組というところも本当に見習うべきものだなというふうに思いましたし、企業への取組というところでは、保険会社さんとかに対しましての高齢者と接する機会が多い企業へのそういった理解促進の取組というところでありまして、そういったところも非常に学ぶべきものが多いのではないかなというふうに思ったところでございます。あと、条例制定についても丁寧に時間をかけて取り組まれたというところでもございまして、そういったところも今後福島市としても検討していくべきなのではないかなというふうに思いました。オリジナルの取組ということで、お金も大分かけているというふうに思いますけれど

も、先ほど佐々木委員からもありましたけれども、そういった取組に対して、市民の皆さんから理解が得られるような充実した内容になっているなというふうに感じたところでございます。

（石原洋三郎委員）先ほど来皆さんがおっしゃっているような形でほとんど出尽くしているのかなとも思うところではありますが、認知症になっても安心して暮らせるまちづくりということで、すごい話だと思ったのですが、片一方で認知症にならないように健康増進政策というのも推進しているまちも多いので、そこで福島市の場合どんなふうに捉えていくかというのがあるのかなと思いました。例えばやっぱり認知症にならないように皆さんで健康増進政策をしっかりとやっていきましょうねというのも一つの考え方としてあるのではないかなと。ただ、やっぱりそういう中でも認知症になったとしても安心して暮らせますよというまちづくりも大切なことではないかなと思った次第であります。

明石市さんであと地域の理解の促進に関しましては、サポーター養成講座とかやったりしているのだけれども、例えば学校に依頼したときに、学校のほうだとなかなか実際に校長先生に言っても響かないようなところがあるというお話もありましたので、実際に声掛けと現実的な地域の中で浸透していくのにはどういう方法がいいのかというようにところも追求していくことが大切かなと思った次第であります。確かに一般の方々が認知症サポーターになってくださるというところがあったとしても、例えばそれを子供たちにどこまで浸透させていくことができるかなというようにところも一つの課題かなと思った次第です。

また、認知症のチェックシートで、本のまちづくりも推進しているので、図書カード500円分をアンケートに答えた方には提供していますというようなことでおっしゃっておりまして、例えば福島市も今度図書館の建設というのも考え方として出てくるかと思うのですが、そういったときに併せてそういう図書カード500円分を後日郵送するというのも一つの手だてかなんて思った次第であります。基本的には予算的には初年度が3億3,000万円かかって、その後の年は6,000万円程度ですというようなお話があったのですが、国の交付金を活用しながら最初やっていったような初期投資のような話も言っていたので、もし福島でもそういうことができるのであれば、初年度は確かにお金がかなりかかるかと思うのですが、財源を確保して明石市のようなことをやっていくというのは大切だと思った次第であります。

あと、条例の中では定義といたしまして、認知症の本人と、及び家族という表現ではなくて、認知症の人などというふうに一つの言葉にしてしまったのですが、家族も一体的にやっていくから、認知症の人などという表現にしていますという話だったのですが、かえて例えば認知症本人及び家族というふうに明記したほうが場合によってはいいような気がしますし、あるいは明記しなくても確かに一体として考えるということで認知症の人などとしてもいいのかなんて思ったのですが、明記の仕方はいろいろ考え方があるかなと思った次第であります。

あとは、認知症カフェとか、そういう家族会の関係団体との個別ヒアリングとかアンケートなどに

意見を聴取しながら条例を制定していったというふうなお話もありましたので、そういう幅広く市民の方々の意見を聴いていくというのは、条例制定もしする場合は大切なことかなと思った次第です。

（穴戸一照委員） 今皆様からいろいろとお話がありましたように、ある面において考えてみると、福島市と明石市の認知症対策、特に早期の気づき対策については格段の差がある。これは、今回我々みんな視察して、つくづく大きく感じられたのかなと思います。ただ、それを明石市のレベルまで到達させるためには、相当システムの的にも制度的にも構築していく必要がある。そうした中で何を最初にしなくてはならないかということを考えた場合、我々が今回認知症の患者の早期発見という部分と気づき、そういうような部分と家族と住み慣れた地域で暮らすというふうな観点からすれば、やっぱり皆さんがおっしゃられているとおり、最初に認知症対策をする上でも、早期の発見、気づき、それに対する対策という部分をどういうふうに構築していくかは、大きなことなのかなというふうに考えたときに、やはりこの明石市においては条例制定とあんしんプロジェクトというように2本立てで進めていると。あんしんプロジェクトもいろんな内容を含んでいるので、その中で何を最初にやらなければならないかということは、明石市がやられているとおり早期判定、気づき、これは皆様もおっしゃっているとおりなのです。ただ、本市においてもそれを導入してもやはり判定する専門家、専門医、これが非常に不足していると。例えば今の場合だとあずま通りクリニックさんが専門医ということでやっていらっしゃいますけれども、そういうような形でやはりそういうような部分が非常に不安で、ただ明石市さんの場合は自分のところの明石市のお医者さんばかりではなくて、他の例えば神戸市とか、隣の市で判定をされてもその費用負担をしているというのが現状ですから、やはり幅広く市民の皆様判定していただいて、早期の気づきで対応していただくということが非常に大きな本市とは違う部分が、幅広く判定をして、幅広く市民の皆様認知していただくということなので、私としてはやはり早期発見をするためのシステムというか、それがその後の家族介護、家族支援に結びつくのかなというふうに考えますと、いかに早期発見のシステムで体制を整えるかが大きな視点なのかなということで今回は学ばせていただきましたが、大体皆様と同じだと思いますけれども。

（高木直人委員） 今皆様からもお話がありましたとおり、本当に明石市の認知症チェックシート、こちらによるいわゆる早期発見、早期治療につなげる活動はすばらしいと思いました。福島市も健康福祉部で福島市もの忘れあんしんガイドブックというのを実は作っておりまして、この最後に物忘れの気づきチェックというのが実はありまして、10項目なのですけれども、ただこれをやるためにはまずこのガイドブックを手になければたどり着かないというところが、やはりまず早期発見というところに課題があるかなというふうに思っております。ですので、例えばこのガイドブックや、またはせっかくチェックシートもあるわけですから、それをやはりこの明石市のようにより多くの方々にまずはこういうチェックシートがありますよということもご周知しながら、500円の図書券をつけるかどうかというところはまたいろいろと皆さんと議論する必要があると思うのですけれども、やはりまず早期発見、こちらのほうをしっかりと取り組む必要があるのかなというのを感じました。

あと、実際にもしこれは疑わしいかなってなったときに、受診を受けていただく、そのための受診率の向上についても明石市は6,000円分のタクシー券でありますとか、あとは1年間のGPSの基本使用料、このどちらかを選べるといったことで、そういったもので受診率の向上にもつなげているという点も非常に注目すべきところだったと思いますし、あとは実際に認知症と診断されたときに2万円の認知症サポート給付金でありますとか、またあんしんチケット事業、こちらによってご本人や、また家族への負担の軽減、こちらも図っていらっしゃるというところは非常に今後参考とすべきところかなというふうに思いました。まずは、本当に皆様からお話あったとおり早期発見、早期受診というか、治療、この体制、これをこの明石市の今回の視察内容を参考にしながら、これから生かしていきたいなというふうに思っております。

(川又康彦委員長) 私からも、今回明石市を訪問させていただいて、我々の所管事務の調査項目として認知症対策と家族の支援についてということだったのですけれども、時系列で、明石市については特に条例制定という部分が非常に特徴的なのではないかとということで選ばせていただきました。私としては、予想として条例制定があって、その条例という裏づけがあって各種施策がその後できたのかなと勝手に思っていたのですが、実際に訪問させていただくと、最初に認知症あんしんプロジェクトというものがあって、特に早期発見、早期診断という部分のプロジェクトを相当前からやっていて、それがあって、それを補完するという部分もあるのだと思うのですけれども、その裏づけとしての条例を制定して、それに伴って家族負担の軽減という部分で、先ほど石原委員からもありましたけれども、家族等という文言の中に一番前文のほうには家族も含むみたいな感じで書いてありますけれども、そういった条例の裏づけがあって、家族負担の軽減のような認知症サポート給付金とか、ショートステイの利用とか、宅配弁当、寄り添い支援、GPSの貸与とか、そういった部分の施策がだんだんと膨らんでいって、今非常に手厚い施策が生まれているのかなということを改めて感じました。

翻って、福島市の場合は、当局説明の中でもなかなかそういった部分まで踏み込んで行う予定は、今のところないという形を取っておりましたが、ただ福島市においても、例えば認知症サポーターについては明石市よりも相当数が現状でも多い。これは、商工会の会員だったときに私も商工会としてそれを取った記憶があるのですが、商工会議所とか商工会を通じて事業所単位で取ったのが非常に福島市多分多かったのだと思っているのです。そういった窓口が全然違うところの取組などは非常に早い部分もあった部分があるのかなと思って、そういったところの早期診断とか、先ほど副委員長もありましたけれども、チェックシートもケアパスということで作ってはいるのです。そのところを多くの人に実際に、幾らネットでダウンロードできますよと言ってもそんなことする人はなかなかいないので、そういったところに具体的につなげていくプロジェクト的な部分がもう少し必要なかなということをまず感じました。その上で、それを補完する意味で条例をつくるというのも段階としてはあるのかなというのを感じました。

私のほうからは以上です。

各委員の方からそれぞれ意見開陳のほうをしていただきましたけれども、ただいま皆さんからの意見開陳を受けまして、ここはどんな感じですかとか、ほかの委員の方への質問というか、そういった部分も含めて何かありましたらご意見いただければと思うのですけれども、どうですか。そちらについては、よろしいですか。

(穴戸一照委員) 大体皆さんの意見としては早期の気づきという、早期の発見という部分では一つのポイントは整理されているわけだから、そこをどうするかという、どういうふうに取り組むかという問題がありましょうから。

(川又康彦委員長) それでは、皆さんからのご意見も出尽くしたと判断させていただきまして、次に視察2日目の柏市の取組に対するご意見についてをお願いいたしたいと思います。

先ほど右からでしたので、反時計回りということで穴戸委員からお願いしてよろしいですか。

(穴戸一照委員) 柏市の場合は、我々の今回の視点であります家族の介護、家族支援、それが非常に各団体との連携がうまくいっているのかなという、その連携の仕組みが構築されているのかなというような部分において、在宅医療と介護の連携というのが非常にうまくいっているのかなということ、これはやはり本市においては、この前の地域包括支援センターのケアマネジャーのお話からも、なかなか医療機関とケアマネジャー連携というのは取れていない。その一つは、ケアマネジャーが非常に不足しているということで忙しい、そこまで手が回らないというのが現状のようでして、そこを考えると、この柏市の場合は在宅医療と介護の連携というか、これはいろんな団体がそのあれの中に入っとうまく連携されているのかなというふうな感じで、相互の連携というか、連絡が密にされていると。そうした中で、福島市の場合に返ってみれば、連携のシステムをまずどういうふうに構築していくのかというのが大きな課題なのかなというふうに感じてきまして、特に、かかりつけ医、ホームドクターとケアマネジャーの連携というか、協議会の中での患者に対する連携、そういうものが非常に密になっているというふうに伺ってきましたので、これから早期発見された方々が、ある程度家族介護の下、家庭でされている方々と、常に診ていただくホームドクター、かかりつけ医と、あと専門医と、あとはケアマネジャーと、あとは例えばショートステイとかデイサービスに通っている施設との連携において、いかに家族の負担を軽減していくか、これがやはり福島市の場合はもう少し突っ込んだ取組が必要ではないのかなというふうに感じました。そのためにやはりケアマネジャーとかのそういうふうな会合、エッセンシャルワーカーの人材をしっかりと確保していかないとそこまで手が回らないのかなというふうに感じました。福島市の場合はどうしても、この前のお話を聞いても、僅か十何人で一生懸命やっていると。それぞれの地域包括支援センターにいる人数の中でやっている。1人、2人しか配置されていない、その皆様で相当の人数の皆様を見ていると。そうすると、どうしても、自宅で例えば気づいたとして、介護認定とかそういうものを受けていない方、また受けようにも受けていない方々に対する支援というのはなかなか行かないのかなというふうなのを感じたところがありますので、やはりそこら辺を強化するようなシステムをつくっていく必要があるのかなという

ことで、あと福島市でももりん体操とかやっていますけれども、フレイル予防ですね、そういう点の
アピールというのがちょっと少ないのかなと。もりん体操を各地でやりましょうといっても、柏市
さんのようには熱心にはやっていないと。その辺がやっぱり、柏市においてもおっしゃっていたとお
り、介護予防のそもそものあれは健康と栄養と運動であると、これが3つの要素であるということ、
これは福島市の地域包括支援センターの参考人の方もおっしゃっていますが、そうしたときにやは
り健康という観念でのフレイル予防というのが介護予防においては大きな役割を担っているのかな
というところを感じました。

（石原洋三郎委員） 柏市さんのほうですと、情報共有システムの構築というのが進んでいると思った
次第であります。ちょっと福島市の状況がよく分からないのですけれども、ただ認知症患者さんの本
人とか家族にとってみれば、医療、介護とか様々な分野においてタブレット端末とかパソコン等々か
ら患者さんの情報を共有できると。情報を共有するということは、地域でその人がどういう状態か
というのを把握して支えているということにもなるかなと思いましたので、個人情報に留意すべき点
はあるかとは思いますが、一つのすごい取組だと思った次第であります。そのためには、柏市だと医
師会が中心になってやっているというような話もありましたので、どこがリーダーシップを取ってそ
ういう体制を築いていくかというのはあるかと思うのですけれども、在宅医療推進のためにも医師会
が推進しているというところがあったので、一つの考え方としては見習うところがあったかなと思
う次第であります。特に資料の28ページを見ましたときに、地域は病院なのだと、我が家が病室であ
ると、道路は廊下であるというような形で、まさに地域を一つに考えていくというのは目指す方向性
としては大きなところかなと思いました。いろいろ大学と商工会議所と商工会とか、シルバー人材セ
ンターとか、社会福祉協議会とか、様々な関係団体をつないでいくということも大切なのだと思
った次第であります。

最後に、フレイル予防ということで、地域で様々な予防啓発活動とかフレイル予防をしていますよ
というお話がありました。そこにはWAONカードでちょっとしたポイントがもらえるというような
話があって、財源が関わってくるようなところもあるのかなと思ったのですが、それを福島に展開
できるかどうかは別としましても、一つの、地域でフレイル予防を推進していくというのは大切なこ
とであると思いますし、これは各町内会でやっていることだとは思いますが、もりん健康体
操ですね、今穴戸委員がおっしゃったような形で、もりん健康体操をさらに普及推進していくと。
やはり地域の皆さんで顔を合わせるということは元気の源でもありますし、何かこの頃Aさんちよ
とまた体調がよくないとか、認知症ぎみなのではないかなというふうに地域でも早期発見でき
るというような話になってきますので、やはり地域での活動を活発化させていく、フレイル予防にもつ
ながっていくということが方向性としては大事なことかなと思った次第であります。

（遠藤幸一委員） 今ほど穴戸委員と石原委員の話ともかぶる部分がありますけれども、地域包括ケ
アシステムということで取り組まれているということでありまして、特に印象的だったのは医師会との

連携です。あと、東京大学との連携ということで、本当にそういう多くの、自治体としてほかのいろんな団体と一緒にあって連携して取り組まれているということで、なかなか医師会との連携というのが、視察の際にも話が出たと思いますけれども、福島市に置き換えたときにできるのかというところの課題はあるのだらうなというふうに思ったところでありました。あとは、東京大学との連携というところでは、今ほど石原委員からありましたとおり、情報共有システムの構築、カシワニネットですかね、ということで多くそういう皆さんで認知症の方の情報が共有できるということで、そういう共有できることでいろんな方面から様々な支援ができるのではないかなというところで本当に先進的な取組だなというふうに感じたところであります。

見せていただいた豊四季台地域、団地、先進モデルとして取組をしているというところでもありますけれども、そこを他地域へ横展開していくというのが目標だということでもありますけれども、福島市に置き換えたときにその取組についてはなかなか難しいのかなというふうに感じました。

フレイル予防につきましては、地域全体で取組をしているということで、駅前を含め、のぼりとかそういうところで地域全体に取組が浸透しているなというふうに感じましたし、ポイント制度というところでは皆さんが楽しんでそういった取組をできるということもありますし、そういった部分が多少なり地域経済にも好影響を及ぼすのではないかなというふうに感じたところでございまして、非常にポイント制度の部分については本当に素晴らしい取組だなというふうに感じたところでございます。

（佐々木優委員） 全体的なまちについての感想を言うと、まちづくりと一体に医療や介護が考えられているということが本当に素晴らしいなというふうに思いました。立地条件なんかはあると思うのですが、これまでの状況を生かしてその地域に合ったものにしていくということ、そのために住民や自治体や物件の所有者、事業者、そして大学生が関わって進めてきたということは、ここがポイントなのではないかなというふうに思いました。やっぱり未来志向で物事を考えることとか、これまでの経験値やこれまでやってみたけれども、うまくいかなかったようなことも角度を変えて考えていくことはとても大事だというふうに思いました。実際団地を歩いてみて、団地の中に医療、介護の拠点があって、スーパーがあって、バスも走っていて、住民が集まるような広場もあってと、高齢になっても子育てをしても住みやすいまちだろうな、いいなというふうに感じました。そこに在宅医療をはじめとした多職種の医療機関や介護職の皆さんが連携して、顔の見える関係性をつくってきたというのがやっぱりとても大きいなというふうに思うし、その事務局を自治体が担っているということはとても重要だなというふうに感じます。顔を合わせて話すというのはすごくエネルギーが必要なことなのですが、こういう基本的なことはやっぱり改めて大事だなというふうに思うし、みんなが学ぶということがとてもいろんな事業に波及されているのではないかなというふうに思います。福島市でどうかといえば、福島県も福島市も医師不足、医療機関で働く人たちが不足というのはもうずっと続いているわけですが、何とかそういう皆さんをつないでいけるような福島市の取

組に尽力していただくことはできないかなというふうに感じました。

そして、フレイル予防も早い段階から実施していくことによって、改善して維持していくということにつながっていくなというのを改めて感じたし、そこにもやっぱりフレイルプロジェクト2025というタイトルをつけて、そこに医師の皆さんや多職種の皆さんもちゃんと関わってきいているというのはとても心強いなというふうに思いました。全体的に一緒にやっていくという流れがつけられているのが本当に素晴らしいなというふうに思いました。駅前にもフレイル予防の横断幕があったりして、目につくところにちゃんと設置をするという、基本的だけれども、大事なことだなというふうに感じました。

（佐藤 勢委員）多職種連携とか地域包括ケアといえば柏モデルというのは、正直医療、介護のメンバーだったら1度は聞いたり見たりしているところではあるのです。なので、様々な講演会でも、多職種連携の講演会でも柏モデルとかは絶対出てくるし、オンラインなんかでもよく聞いていたりもしていたのです。実際に視察に行って、あの団地を見させていただいて、やっぱりすごいなと、視察に行ってもよかったなというふうに感じたところがありました。まち全体で、その団地全体で福祉、医療、そういったところで地域連携を整えている。やっぱり視察に行かせていただいて、すごく有意義だったなというふうに感じたところがあります。そして、実際に担当者の方とお話をして、担当者の熱量というか、今までの経緯とか、大変だったところも含めていろんなお話を聞かせてもらって、やっぱり連携の大切さ、そういったところは非常に感じたところがありました。なので、実際に行ってみて、感じてみてというのはやっぱり大事なところなのだなというのは個人的には私は思ったところです。

（半沢正典委員）首都圏に近いということで、首都圏に通勤する市民が多いという、それでまた人口も増えているということで、そういう意味ではちょっと福島市とはまちのづくりが違ふのかなというふうに思いつつ、課題は一緒に、ただやっぱり東大のキャンパスがあるということで、それが一つ大きな、今回の柏市の在宅医療、介護連携のシステムが出来上がった要因としては大きいかなという印象を持ちました。市の課題としては非常に病院が少なく、病床利用率が非常に高いというような課題意識から、そしてまたアンケートでも終末期は在宅の要望が多いということで、この2つの課題を解決するためにということで取り組み始めたという話でありまして、そのためには在宅医療の充実と多職種連携の確立ということが重要だと。その課題について、やはりもう既にあったように、医師が中心になって進めないといけないというのは我々も感じているところで、その医師を説得するのがみんな多分ほかの自治体も苦労しているにもかかわらず、先ほど言ったように東大という一つの医療界のトップに立つところがあって、その医師とかがいて、決して聞かざるを得なかったということではないのだと思うのですけれども、うまく医師のほうから、医師が川上だとかという話では決してないのですけれども、しっかりと川上から川下のほうに連携がスムーズに流れたというのがあのシステムを構築できた最大の要因かなというふうに個人的には感じました。福島市におきましても医大があり、医師会があるので、うまく福島県のモデルとして福島市が柏市を参考にできればいいのかなとい

うちちょっと憧れと、もしかしたら福島市が県のモデルの自治体になれるのではないかなという希望を抱いて帰ってきましたということです。

あと、フレイルにつきましても、先ほど言ったように、高齢になって介護が必要になる原因が1つフレイルということで、フレイルの言葉の語源、言葉の発祥地が柏市だということで、様々な取組でポイント制を導入したり、デジタルでポイントをつけて、それをいろんなところで活用できるようなものをしたり、市民を挙げてやっているなどということで、新しいまち、人口が増えていて、新住民が多い中でもしっかりと取り組んで、特に豊四季台の団地のあそこの施設を見ますと、福島市でも蓬萊とか、これから由添とかも、蓬萊はもう既にそういう状況だし、由添も間もなくそういう状況になってくるだろうと思いますので、あそこはURのほうで公募をかけてやったということですが、ああいうやり方なんかもこれから参考にして、あそこでグループホームと各種福祉サービスを一つワンストップでできるようなのもこれから福島市としても考えていくのも重要なことというふうに感じてまいりました。

（大平洋人委員）もう出尽くした感じですが、簡単に言えばやっぱり官民学の連携というのが非常に先進モデルとして行ってよかったなという感想を持ちましたし、今後、先ほども半沢委員のほうからお話がありましたとおり、医大もあるし、逆に言えば福島は本当におっしゃったとおり先進地になる可能性を秘めているなというふうに思いますので、本当に待ったなしの状況でありますけれども、今回の視察を契機にいい提案ができればいいなというふうに、まとめていければいいのではないかなという感想を持ちました。

（高木直人委員）私も、先ほど半沢委員がおっしゃられたように、終末期の療養場所として住み慣れた自宅を希望される方が多いという観点からこの在宅医療、介護連携に取り組まれたという点は非常に素晴らしいなと思っております。やはりこれが進んだのは市と医師会の理念がまず一致した点が非常に大きいかなと思ひまして、そういったところは福島市として何とか医師会さんとの理念の共有といたしますか、そういったところをこれから少しずつでも図っていけるのかというところをちょっと考えた次第でありました。

あとは、先ほどのガイドブックの中でも福島市としても物忘れ相談医という形で、医大とかも含めて、あずま通りクリニックも含めて65施設、本当身近な皆さんのかかりつけ医とかも多分含まれていらっしゃると思うのですが、実はそういう物忘れ相談医という形には一応なっております。ただ、実際に柏市と同じようにどれだけ連携が取れているのか、またその相談医としてもいわゆる往診、在宅へ往診どれだけの先生が対応されていらっしゃるのかはちょっとはつきりとは分からないのですが、ただ包括支援センターのほうからも、今後の認知症における課題としては、医療機関にも認知症に対する相談や認知機能低下に対する専門医の往診などの強化の必要性を感じますということ述べられていらっしゃったので、やはり現状はあまりそこまでの連携も実際にはされていないのかな、また往診体制も整っていないのかなというのが実際のところは

見てとれるところであります。ですので、できれば今後在宅往診体制の充実とか、そういったところも考えたときには、やっぱりこれは実際のところ先生、医師を増やしていただきたいことと、あとは我々にできることとしては情報共有システムの構築、こちらをやはり行政側として医師会と連携をしながら、またあと多職種とも連携をしながら構築して、目指すこと、これが我々行政にはできることではないかなというふうに思いますので、しっかりとそういったところをこれから取り組んでいければと考えておりました。

（川又康彦委員長） 私のほうからは、高齢者にとって医療と介護というのはいずれにしても垣根がありませんのだと思うのですけれども、実際には受け入れる側としては医師があって、介護の仕事というのがあって、全く別の業種がそれぞれに一人一人の高齢者の方を見ているということで、垣根がなかなか越えられない部分は感じてはいたのですけれども、柏市については医療と介護の連携ということで、東京大学という仲立はあったと思うのですけれども、情報共有システムというのは非常に画期的なものなのだなというのは改めて感じました。

ここからは半沢委員と全く同じなのですけれども、では福島市にできるのかといったときには、なかなか現実には難しいだろうというのが正直なところではあったのですが、可能性としては福島には医大ありますので、医大と、医大閥の先生とかも市内の在宅の先生は結構多いですから、そういったところがうまくイニシアチブを取っていただくことで、医師会と連携して何らかのモデルを福島県の中でやっていくというのはできる可能性はあるのかなと。特に、蓬萊の話も出ましたけれども、医大と蓬萊は非常に近い部分もありますので、規模感は非常に小さくなるかもしれませんが、一つのモデルケースみたいところで、地区は限定した中でそういったモデルとして福島市と何らかの形で進めていくべきではないかというような話に持っていくというのは可能性としては非常に大きくあることかなというのを感じた次第でした。

それでは、各委員の皆様からの意見のほうはありましたけれども、先ほどの半沢委員の意見等に対して高木さんから私からもいろいろありましたけれども、そのほか各委員の方からここをこういうふうにしていくともっと何かいい市への提言なりなんなりにつながる部分あるのではないかなといううな、そういった話がありましたらお聞かせいただければと思うのですけれども、そちらについてはいかがですか。

（穴戸一照委員） 先ほど川又委員長と半沢委員からもありましたように、福島には医大があるのではないかなというふうなお話がありました。柏市の場合、東大がその役割を果たしているということなのだけれども、私朝歩いていてまちの人に聞いたら、あそこのちょうど町外れに手賀沼のところに慈恵会医大の附属病院、大きなやつがあったのね。柏市には病院ほかにない、あれは大きいほうなのでしょうと聞いたら、いや、あと4つ、5つありますよというわけです。あと、今これ見ていたら柏市立病院もあるのね。ということは、大病院がありながらもお互いにやるのではなくて、やっぱり東大というあれがあって、そこに専門の機関があって、そこがうまく機能してこういうふうな制度が

できたのかなと。医療の人材も豊富なのかなという、その地域の方に聞いてみると、やっぱり大都市圏のベッドタウンであるということで、そういう大病院も多いということで、それをまとめたのは東大の力も、学閥もあるでしょうけれども、あそこがいろいろ制度をつくってくれたのが大きかったのかなということなので、我々とすればやっぱり県立医科大学があるわけだから、そのところを何とか福島市が説得して、こういうふうな情報共有システムでもいいから、構築できないのかなという。そうすると、今委員長が言ったように垣根を乗り越えて、みんな連携して在宅介護もできるのではないというのが改めて。これだけあそこには大きな病院がありながらも連携しているということはすばらしいことだと思います。大体大きな病院があったらみんな、勢さんに聞くとあれだ、牽制するよね。なかなかあれがあるわけだから。それが連携しているということは大きなことなのかなということ、皆さんの意見も聞きながら現場での話を聞いて、改めて感じた。

(川又康彦委員長) そのほかいかがですか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(川又康彦委員長) では続いて、視察3日目になりますけれども、高崎市の取組に対するご意見のほうをお願いいたします。

また大平委員のほうからよろしいですか。

(大平洋人委員) テーマになっていた件の中で特徴的なのは、やはり中核市、大きな市であるという、高崎市においては市の独自の取組というのが4つございましたね。高齢者向けのサービスであんしんセンターもつくっているし、地域包括支援センターからも拡充して、待つ福祉から出向く福祉という考え方の下でサービスを、これは人件費がすごくかかるなという、待機時間とかの問題とかもお話を伺っていてあったのですが、それによって例えば徘徊の件だとか、そういったものの取組の中で発見率が100%になったとか、それから見守りシステム、こういったものを提供していたりとか、そういったものというのは福島も確実にかなり高齢者の率が高くなっている状況を考えていくと非常に参考になる事例であるし、予算の問題はちょっと置いておいてですけれども、そういったものが非常に必要なのではないかという感じがいたしました。

それから、伴走型の支援事業というのは、これは地域全体が絡んで組織していかないとにっちもさっちもいかなくなるのではないかと。市だけに押しつけるのではなくて、地域もまたそれぞれが認知症の人の家族を踏まえて、民生委員ですとかも地域全体となってやっていかなければいけないということを改めて感じ、それを本市としても受け入れていきながら組織体制をつくっていかなければいけないなというのを強く感じる高崎市の視察となりました。

(半沢正典委員) 高崎市は、特に認知症伴走型支援事業ということで今回の大きな視察の目的でもあったのですけれども、やはり認知症に対する差別とか偏見というのがなかなか共生社会を目指しながらも難しく、そのハードルをまず下げなければいけないということで、もの忘れお気軽相談所ということで、気軽にちょっとおかしいなと思ったら本人でも家族でも相談に行けるところをまずつくっ

たと、あるということがやっぱり素晴らしいことだというふうに思います。これからもうちょっと増やしたいなというような話も出ていますし、行けば誰かがいて、予約も要らないし、気軽にいつでも立ち寄ることができるということが、その存在がやはり市民の安心、そして認知症に対する理解につながっている部分もあるのかなというふうに感じました。

そして、高崎市独自の取組ということで各種ＳＯＳのサービスを紹介していただいて、我々視察した課だけではなくて、庁内横断的に背中のかゆいところに手が届くような、本当にきめ細かいメニューをたくさん並べてつくって、市民サービスを上げていったというのが非常に印象的です。我々どうしても費用、予算の面が心配になったり、財源が心配になるのですが、印象的なのは、市がこのようなサービスをすることによって、またメニューをそろえることによって企業の、この前は森永の話をしていただきましたけれども、森永の工場が移転してきて税金にもつながっていると、その裏づけは市がそのような生涯にわたって安心できるような独自の施策を用意しているというところが企業誘致につながったというところが大変印象深く勉強になったところでありました。

（佐藤 勢委員）最初に、一番驚いたのは高崎市役所の立派さ、いろいろ感ずるものがたくさんあったのですが、そこから入って、やっぱりお話を聞かせていただくと、まずもの忘れお気軽相談所、あと様々なＳＯＳのサービス、これがやっぱり印象的だったなというふうに思いました。正直福島市だと地域包括さんに全部丸投げではないですが、いろんな相談が行くところを、市のほうでもしっかりとそういったサポート体制ができているというところは、多分包括さんの負担も結構減っているのだらうなというふうに思ったところです。そうなってくると、やっぱり包括さんも一人一人に対してのきめ細やかな対応とか相談とか、そういったところもできているし、お互いにウィン・ウィンの感じの関係性が保てているのだらうなというふうに私は思ったところです。

半沢委員もおっしゃられたように、福祉に力を入れると住みやすいまちというのはよく分かるのですが、プラス会社の誘致だったりとか、そういったところでも人口増加にもつながる、ちょっとそこはやっぱり目からうろこのところだったなというふうに思ったところです。私としてはそういうような形です。

（佐々木優委員）高崎市は、地域包括支援センターが29か所あって、その中に高齢者あんしんセンターというふうに位置づけている、高齢者の皆さんの暮らしの相談をそこにしてもいいのだなということもすごく大事だなというふうに思いました。認知症地域支援推進員という方が1名ずつそこに配置をされているということも積極的でいいなと思ったし、その一方仕事量が大変になるということ、別な場所にちゃんと相談する場所も設ける、これもやっぱり今佐藤委員が言ったように分担して、思う存分そこでゆっくり話を聞いてもらえるというのはとても大事だなというふうに感じました。

介護ＳＯＳサービス事業については、最初24時間は大変ではないかというふうに思ったのです。だけれども、転んで起き上がれないということが月に10件ぐらいあるということで、本当にあったらいいなというサービスなのだよなって改めて思いました。宿泊サービスも送迎つきで3,000円で、これは

すごく利用しやすいし、これも本当にあったらいいなと思うサービスだなと。そこにつながった人たちも高齢者あんしんセンターとかにも相談にもつなげられていくということもとてもいいなと思いました。訪問サービスも宿泊サービスも介護認定がない方がたくさんいるというのも結構驚きましたし、そういう方々がほかのサービスにもつながっていきけるようなきっかけになるという、いろんな連携ができるサービスなのだなというふうに感心しました。さっきかゆいところに手が届くという、本当に私もそういうふうに感じました。印象的だったのが、職員の方が箱物を造らなければいろいろやっていけるのだということをおっしゃっていて、福祉はほとんどが人件費だと思うのです。だから、箱物ではなくて人に回していくという考え方がやっぱり必要だなというふうに思ったし、高齢者福祉に力を入れていくということは、明石市とも共通するなと思いますけれども、安心して住んでいけるという自治体になっていくのだなというふうに改めて思ったところです。

（遠藤幸一委員） 認知症の伴走型支援事業ということで銘打っているというだけあって、本当に多岐にわたっていろんなサービスをされているなというふうに感じたところでございます。特に介護SOSサービスというところでは、24時間のサービスということでありますけれども、なかなか大変な取組だなと思いつつも、本当にこういうのがあると安心して、特に家族の方、介護する側の家族の方々が本当に安心して生活できると思いますし、急な用事とかそういうのがあったときにも気兼ねなく頼めるということで、そういったところも含めて介護離職をなくすというところでは、先ほど来あるとおり、働く方々の安心にもつながると、働いている方々、家族の方々の安心にもつながるというところでは多方面にわたって本当にすばらしい取組だなというふうに感じたところでございますし、独自の取組ということで様々取り組まれているということで本当に感心したところでございます。待つ福祉から出向く福祉へということで銘打っているということでございまして、本当に積極的な取組をされているなというふうに感じたところであります。様々広告とかチラシを作られているということで、こういったところを、私も福島市に住んでいてもあまり勉強不足なところもあるというふうに感じるところでありますけれども、そういったことを取り組んでいるということがちょっと福島市のほうでは、取り組んでいないわけではないと思うのですけれども、アピールとか周知がほかのところから比べても足りないのではないかなというふうに感じたところでございます。

（石原洋三郎委員） 認知症伴走型支援事業のご説明の資料の中で組織図というのがあったのですけれども、その中で見ますと、柏市さんとかとは違って、どちらかというと地域包括支援センターを中心に考えている中で、市がそれをサポートするような形でいろんな事業をやっているのかなんていう印象を持った次第であります。やはり地域包括支援センターに福島市の場合大きく頼っている部分があるのかなんて思うのですけれども、やはりでき得れば、お話を聞いていると結構負担が大きいような話もあったので、それを全体的に支えていくということであれば、やはり医療関係の方々とか認知症の初期集中支援に関して力を入れていくというのが福島市においても重要なことかなと思った次第であります。

また、伴走型のもの忘れお気軽相談所というのがあって、今後増やしていくようなお話もあったのですが、難しいところもあるのですが、市内の広い面積の中に1か所、2か所だけだと、例えば北は茂庭から南は松川というところで、そこに行くというのも身近なものなのかという話もあるので、やはりそこは地域包括支援センターを厚くしていくというのも一つの手ではないかなと思った次第であります。

また、介護SOSサービス関係にしましては、これは本当に当事者にとってみればありがたいサービスではないかなと思いますので、福島市でも財源を確保しつつ、こういったサービスを実施できればいいのではないかなと思いました。例えば高齢者力しごとSOSとか、高齢者世帯買い物SOSというのは、本当に今までにここまで行政がやるのだというようなふうにも思ったサービスでありますので、もしこれができれば本当に当事者にとっては助かる話だと思った次第であります。

あと、農業体験バスツアーというのもありまして、これはまさに認知症の方を中心に対象とした形でやっています、福島市でもこういう事業やっているのかどうかちょっと分からないのですが、やはり認知症の方、疑いのある方に関してこういう農業体験バスツアーをやるというのは、行政がそういう方々に寄り添っているということにもなると思いますので、こういう事業をどんどんやっていったほうがいいのではないかなと思った次第であります。

(穴戸一照委員) 高崎市さんは、前の柏市と明石市と違って、福島市に似た地理的条件ですね。西側のほうの山沿いのほうは合併によって中山間地であると。高崎市周辺は本当に人口が集中していると。まさに福島市と同じような、さっきの2つは人口密度が非常に高く人口も多いというのを考えると、やっぱり待つ福祉から出向く福祉ということで、様々な介護SOSというものは非常に効果的な施策なのかなということで、それが地域の皆様にとっては例えば買物サービスだったり、タクシーサービスだったりということで。そうすると、基本的に伴走型支援ということで、家族介護をしている方にとってみても例えばお泊まりサービスとか、あとはお手伝いに行く、出向くサービスとか、非常に地域の特性というか、地域の状況に合ったサービスを展開しているのかなというふうに感じまして、家族介護をする上においては非常にありがたい。先ほど来話があった介護認定を受けた方ばかりではなく、それと思われる方でも引き受けてくれるというところがやはり介護予備軍、ある程度気づいてはいるのだけれども、1人では置けない、1人では留守番できないという方なんかをお泊まりサービスということで支援していただいて、物忘れ相談所で早く気づいていただいて、ああ、この方は物忘れが、だから認知症がちょっと始まったのだなという、家族もそういう方々を1人では置かない。そういう方々がいれば、若い夫婦は泊まりに行くこともできないと。1人では置けないと。だから、なかなか出かけられない。そうすると、家族の介護負担というものに通じてくるのかなという部分において、非常に地域的な特性をうまく生かして出向く福祉を実施されているのかなということで、福島市も見習う部分が非常に多いのかなという。早期に気づいた家族支援という観点からすれば、伴走型支援を展開されているということで非常に有意義なサービスではないかなというふうに感じまし

た。

（高木直人委員） 私も皆様と同じところを感じました。認知症の人や家族の方、あれ、認知症かなと思ったときに、どこに相談していいかというところからまず悩まれると思うのです。本市の場合にはそういった相談についてもやはり地域包括支援センターが引き受けていらっしゃるというふうになっていますけれども、まずそこが出てこないとどこに相談したらいいのかというところになると思うのですけれども、高崎市でいわゆるもの忘れお気軽相談所としてまず1つぽんと相談窓口を明確に示したことによって、何かあったときにははその相談所に相談してみようかというふうに市民の方が明確にまずイメージされるというところは非常に相談所を設けられたところが大きいのではないかなというふうに思いました。

あとは、やはり介護SOSサービス、こちらですね。家族への支援にとっては非常に大きい意義があるなと思いました。皆様からも意見ありましたけれども、介護認定を受けていらっしゃる方でも利用できるというところ、私本当に結構相談を受けるのですけれども、介護認定を受けていないのですけれども、何かサービスないですかという、ご自分たちも仕事をされていたりとか、なかなか常に見ることできない、また何かあったときに認知症の家族を見てほしいというようなときがあるにもかかわらず、なかなかサービスが受けられないという点が多くの方々からやっぱり相談受けるのですが、こういったサービスがあれば、どうしてもものときには利用して、ですからできれば本市としても今回の大きな調査テーマとしての家族支援というところから考えると、この介護SOSサービス事業、これはぜひ注目すべき点かなと思います。確かに予算を取るのは非常にかなり大きな負担になると思いますけれども、やはり将来を見越して、必ず市民の方々にとってはこれが事業として成り立っているということが非常に安心感につながるといいますので、ぜひとも将来的に本市としてもこのサービス事業の展開、これを目指していただければなというふうに考えておりました。

（川又康彦委員長） では、私のほうからですけれども、今回の高崎については伴走型支援拠点ということと介護SOSサービスという2つの件があったかと思います。伴走型支援の拠点について非常に期待している部分があったのですが、正直伺ってみてお話をいろいろ聞いた中では、もちろん効果的な部分も、地域包括の負担を多少なりとも減らしている部分はあるなと感じた部分はありましたけれども、規模感が非常に小さいということで、どこまで有効性があるのかなというのは少し正直疑問に感じていました。もし福島市やるのであれば、今も地域包括支援センター、高崎もそうですけれども、委託で各団体がやっていて、福島市内に今相当増えている認知症カフェ自体もそこでやっている認知症カフェも結構あるのです。であれば認知症カフェのほうに何らかの伴走型支援拠点の財源をある程度与えて、何か所かやってもらうような、4か所か5か所。時間はもうちょっと短くてもいいし、そういった形であれば相当実現性はあるのではないかなというのは感じました。

もう一つ、SOSサービスについては、これは財源で市が全部やるというのは正直私としては現実的ではないなと思っていて、この話は行くまであまり認知していなかったものですから、この話を向

こうに行って聞いたときに、こういうのだったら使えるのではないかなと思っていたのが、福島市ではファミリーサポートセンターという形で、子育てで何らかで預かってもらいたいとか、急に熱出たのだけれども、ちょっと見てもらえませんかとかという形のマッチングのサービスを相当以前からやっていて、これが私は非常にいい事業だなと思っている部分もあります。全部を市のほうで丸抱えするというよりは、石原委員からも以前お話があったとおり、互助、共助という部分をどういうふうにするかというのが大事な部分だろうなと思っている、ご近所さんってなかなか今希薄になってきて難しい部分であれば、例えばこのファミリーサポートというのは今子育て限定になっていますけれども、こういった部分に介護という窓口を入れることによって、実際にお手伝いするとか預かるのは市の行政ではないですけれども、一般の方が多少のインセンティブとか費用負担という形で、それぞれの間を取り持つというのは可能性としてあるのではないかなというのは感じた次第でした。

それでは、今回のご意見の開陳についても皆さんからこんなところどうなのだよというような、もしありましたら。いかがでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(川又康彦委員長)では、本日いただいた意見につきましては、正副委員長手元で内容を整理させていただいて、調査のまとめの際にお示しさせていただきたいと思います。

次に、議題のほう移りまして、意見交換会についてを議題といたします。

前回の委員会で認知症対策や家族支援の在り方について市民の意見を聴取するために、認知症の患者を抱える家族を対象にした意見交換会を4月の下旬ぐらいに開催することといたしました。正副委員長手元で意見交換会の素案のほうをまとめさせていただきましたので、DDの意見交換会についての案をご覧いただきたいと思います。

日時は、4月下旬の平日といたします。候補日については、本日の委員会の閉会後に調整させていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

テーマについては、記載のとおり、認知症があっても住みやすいまちづくりについてとさせていただいて、開催形式については、現状では通常のスクール形式、議員と参加者が向かい合って全体で共有しながら意見交換会を行う形式のほうを想定しており、定員は15名程度、公益社団法人認知症の人と家族の会、こちら福島支部から認知症の人を抱える家族の方を対象にしたいと思います。イメージとしては、以前私立の保育所の団体の方がいらっしゃって、こういう対面形式でやったのですが、そのようなイメージを想定していただければよろしいかなと思います。

内容としましては、当局説明、参考人招致、先進地視察から得た委員会としての知見を我々のほうで説明しながら、認知症があっても認知症の人とその家族が住みやすいまちにしていけるために、どのようなことが家族の負担になっていて、それを解消するためにどのようなことが行政としても必要なのか意見交換をしたいと考えております。

会場は909会議室で、通常の机、椅子の配置を変えて対応したいと考えております。

説明は以上となりますけれども、何かご意見がございましたら。

(半沢正典委員) ちょっと私の勉強不足で申し訳ないのですがけれども、公益社団法人認知症の人と家族の会というのは、これは全国的な組織の中の福島市。

(川又康彦委員長) 福島県支部があつて。

(半沢正典委員) 県があつて、市があつて。

(川又康彦委員長) はい。

(半沢正典委員) 大体構成されている方、会員とかというのは何人ぐらいいらっしゃる団体なのか。

(川又康彦委員長) 事務局のほうで確認させていただいたところ、構成員が福島県支部で400名、福島地区会でそのうち大体200人ぐらい。

(半沢正典委員) 400人のうち市だけで200人だ。

(川又康彦委員長) ええ、結構多いのです。最初はグループワークみたいな感じでもできるかなとも思ったのですが、内容とかその辺についてもちっと分かれ過ぎると難しい部分もあるのかなというふうに感じまして、現状では15人程度の定員でということで家族の会の代表の方にはお願いをしているような状況となっております。

(宍戸一照委員) 具体的にはこれからまだ話合いはあるでしょうから。マニュアルとか、聞く内容とか、協議内容とか、懇談というか、聴取内容か。

(川又康彦委員長) 4月下旬になりますので、3月の定例会議終了後に、その時期で、委員会の中で話になるのか、委員会後の話でそういった部分について細かいところ詰めていくのか協議しますけれども、4月下旬までまだ時間ありますので、その辺についても先方とも少しお話をしながら、よりよい意見交換会になるように努めていきたいと思っております。

(宍戸一照委員) 取りあえずこちらが受けてくださるということなのでしょう。

(川又康彦委員長) それは受けてくださるとのことです。

(宍戸一照委員) 内容については詰めてもらえばいいことでしょう。

(川又康彦委員長) はい。

(宍戸一照委員) それからですね。

(川又康彦委員長) はい。

ほかありますか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(川又康彦委員長) それでは、そういった内容で意見交換会については考えていきたいと思います。では、最後、その他になりますけれども、委員の皆様から何かございますか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(川又康彦委員長) では、以上で本日の文教福祉常任委員会を終了いたします。

午前11時19分 散 会

文教福祉常任委員長 川 又 康 彦